

教育委員会

コラム Vol.25

教育長室の窓から

時代の流れの中で
消えていった言葉



令和7年の4月号コラム（Vol.11）で、学校方言について取り上げましたが、今回は、学校で使われている言葉、あるいは使われてきた言葉で、時代の流れの中で消えていった言葉を取り上げます。私を含め、当たり前のように使い、あまり疑問に思われなかった方も多いかと思います。（私も、教師になり立ての頃は、疑問に感じませんでした。）

学校の昇降口に置かれている履物箱。学校では「下駄箱」「靴箱」「シューズボックス」といろいろ呼ばれています。（私は、歳のせいか下駄箱ですが、靴箱という先生もいました。）昭和30年頃までは下駄履きの子どもが多く、手には「草履袋」を下げ通学していました。袋の中身は草履から布製の「ズック」と呼ばれる靴に変わり、やがて「上履き」「上靴」と呼ばれるものになり、バレエシューズ風のものを採用した学校もあるとのこと。学校は、木造校舎の時代から土足厳禁とされてきたため、外履きと上履きは使い分け、体育用の靴を別に定めている学校もあります。また、保護者の皆さんも参観日には、スリッパに履き替えますし、来校者もスリッパに履き替えます。履物一つにしても、時代とともに学校での呼び方が変わってきました。「下駄箱」という呼び方は、家庭の玄関でも使われていますので、今後使われるのではないかと思います。

ところで、教師になることを以前は「教壇に立つ」「教鞭をとる」と呼んでいましたが、最近はあまり耳にしなくなりました。私の小学校・中学校時代（高校にもありました）、教室には「教壇」が置かれ、教師は一段高い位置から子どもたちを見渡していました。「教壇」がなくなったことで、教師は子どもと同じ目線で向き合うようになりましたが、一方では「母校で教壇に立つ」といった表現はほとんど使われなくなりました。「教鞭」は教師が指導用に使うムチや竹の棒を指し、体罰を連想させるこの言葉は消えました。

子どもたちの使う文房具も変わってきました。「ふで箱」「鉛筆箱」は「ペンケース」や「ポーチ」と呼ばれるようになりました。私は小学生の時、「ふで箱」に折りたたみ式のナイフを入れて、ナイフを使って鉛筆を削っていました。電動鉛筆削りが普及してから、刃物を使う機会は減り安全度は増しましたが、一方で、子どもたちが手作業を身につける機会が減ったと思います。

言葉の変遷を見ると、学校の歴史も見えてきます。私は、自分のことを思い出しましたが、皆さんはいかがでしょう。子どもたちや私たちが何気なく使っている言葉は、やはり時代とともに消えさる言葉でしょうか。何か、寂しい感じがします。

教育長の

ちょっといい話

楽しく・生き生き・健康に



「木村さんは、27点です」これは、初めて体験したスポーツ吹き矢の点数です。自分なりに、初めての体験で「まあまあ」かと思いましたが、一緒に体験した90歳を超えた方は、何と31点でした。

ところで、スポーツ吹き矢（スポーツウエルネス吹き矢）をご存知でしたか？

本町では、肝付町スポーツ吹矢協会の皆さんが、月2回ほど町文化センターの2階で活動をしています。スポーツ吹き矢は、腹式呼吸をベースとした吹矢式呼吸法で、5メートル～10メートル先の的をめがけ息を使って矢を放ち、得点を競うスポーツです。特徴として、健康効果、集中力・精神力とともに、子どもから高齢者まで誰でも楽しむことができる「礼に始まり礼に終わる」スポーツです。

本町の生涯学習では、「ライフステージに応じた生涯スポーツの推進」を目指しています。皆さんも、日常的にスポーツに親しむ機会をつくってみてはいかがでしょうか。